

大規模交通災害現場で 救助活動に参加した市民に対する メンタルケアの必要性

岡野谷 純¹⁾²⁾ 菅 磨志保³⁾ 田中 克俊¹⁾ 中村 賢¹⁾

1) 北里大学大学院医療系研究科 2) NPO法人日本ファーストエイドソサエティ 3) 大阪大学

ボランティア活動で誰も死んではいけない。誰も傷ついてはいけない。

【背景】

災害とは、自然現象の変化や人為的な原因により人命や社会生活に被害を生じる現象をいう。大災害に遭遇し、衝撃的な体験をした人はストレス症状（惨事ストレス）を起こすことがある。

※ Tuckmanら 1973、心的トラウマの理解とケア（金ら）

対策：

1) 本人・家族に対し：メンタルケアを実施
※ Berahら 1984

2) 消防・警察・医療者に対し：事前教育訓練・メンタルケアを実施
※ Alexanderら 1990

【課題】

市民については、惨事ストレスの可能性やケアの必要性は理解されてきたが、積極的なメンタルケア、組織的な教育・支援体制は構築・整備されていない。

【目的】

人為災害、特に大規模交通災害に遭遇し、ボランティアで活動した市民に対する継続的な調査、健康管理、メンタルケアの必要性を検討する。

【災害概要】

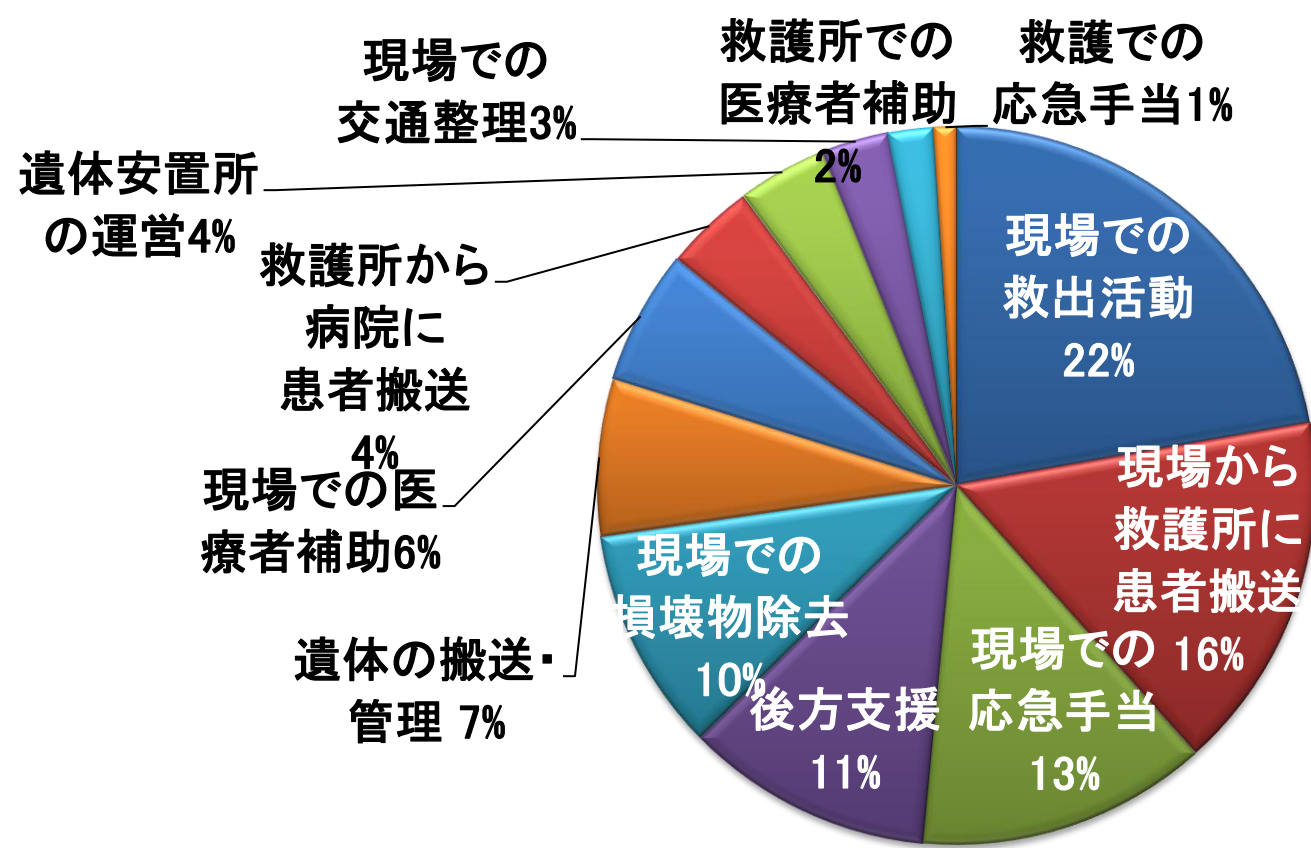
名称：JR福知山線列車脱線事故
種別：列車脱線事故
日時：2005年4月25日(月)
時刻：9時18分頃（ラッシュアワー）
場所：兵庫県尼崎市 JR福知山線 塚口～尼崎駅間 第1新横枕踏切 手前付近
状況：死亡者：107名、負傷者：562名

【対象・方法】

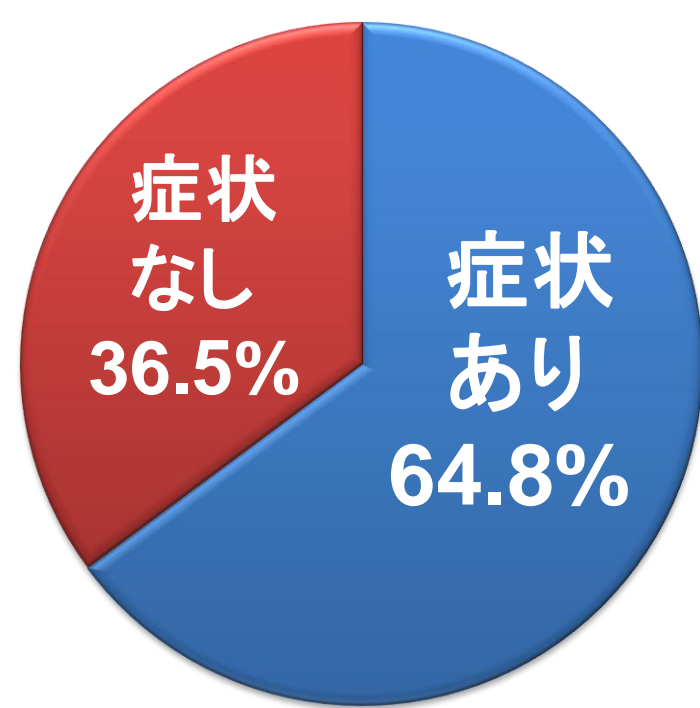
対象：JR福知山線列車脱線事故の現場周辺企業に属し、事故当時、ボランティアとして救助等の活動に参加した方
方法：質問票(無記名)を直接配布し、郵送により回収。
統計：X²検定、Mann-Whitney検定 有意水準 < 0.05 SPSSver12.0 北里大学倫理委員会より承認
配布：70社、回答：77名、有効回答：54名（率：70.1%）
※回答から「今でも記憶から離れない災害が福知山線事故でない者」(阪神・淡路大震災)を除外した。

【結果】

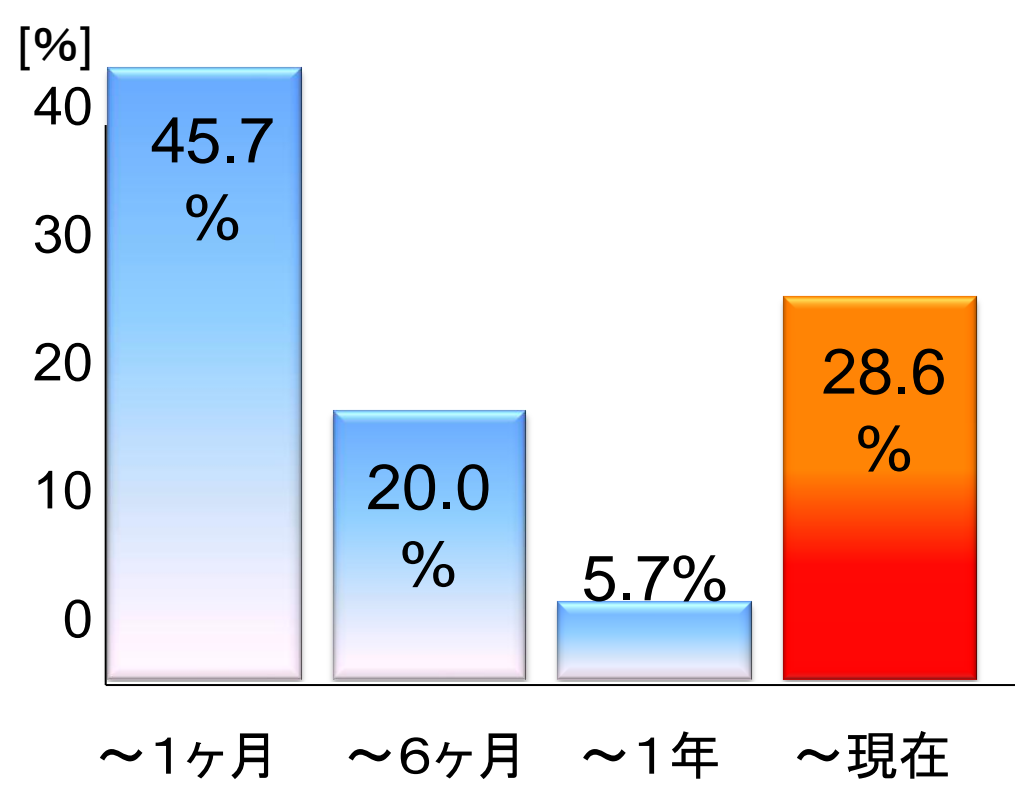
■活動：



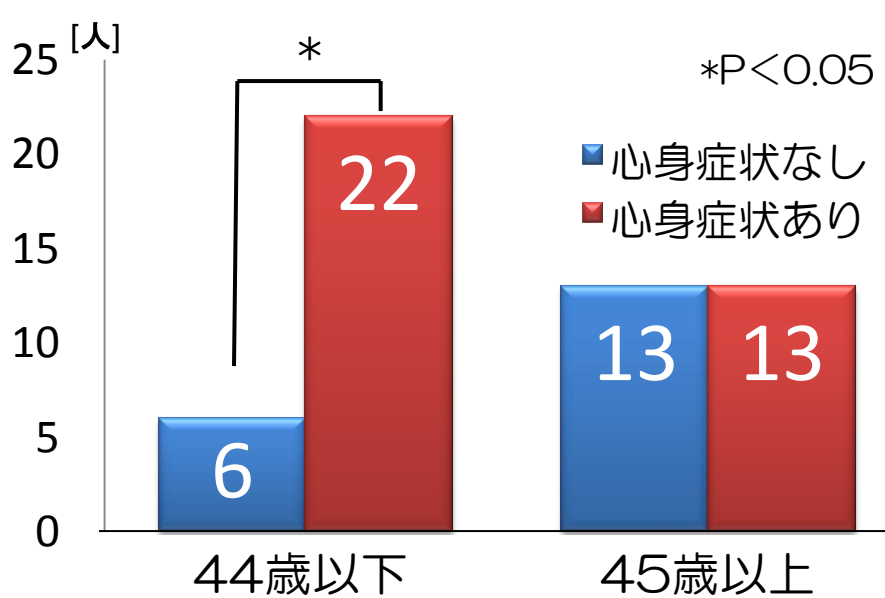
■症状：



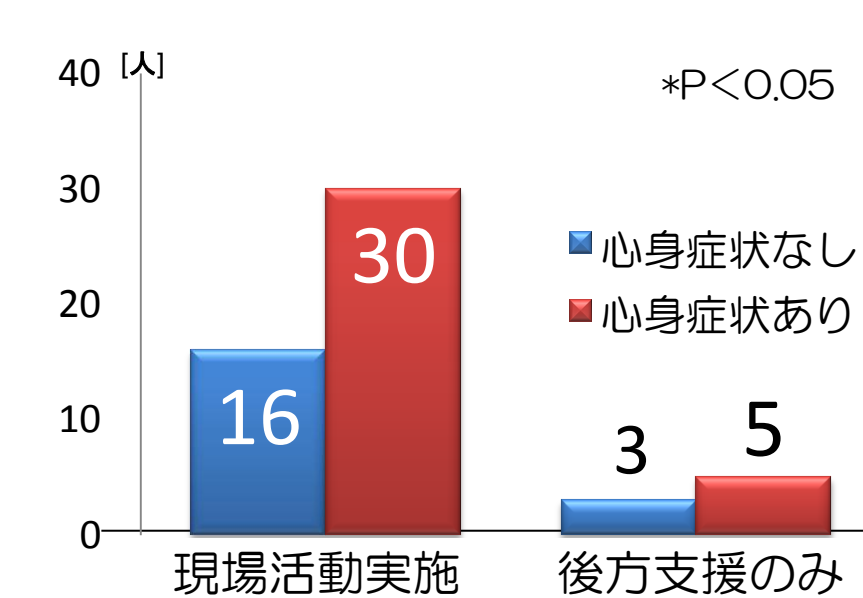
■症状継続期間：



■症状有無と年齢



■症状有無と活動内容



【結論】

大規模交通災害時に現場で救助等の活動をする市民は惨事ストレスを受ける可能性が高く、その症状は時間経過により簡単に消失するとは言えず、継続的な調査や直後からのメンタルケアが必要である。

【考察】

活動をした人の64.8%にストレス症状があり、その28.6%は現在まで症状を継続していた。

- 災害時活動者にストレス症状があり、メンタルケアは必須とする先行研究を支持する。
- 一方、JR福知山線脱線事故の先行研究では2ヶ月後に症状はほぼ解消しているが、本研究では活動者の継続的な調査、全活動者への結果のフィードバックが必須であると考察する。

若年層で症状が有意に高い。その9割弱が現場で救出・救護活動を実施し、多くが自責の念を訴え、現在も継続している。

- 特に若年層に対する直後からのケア、また後着する職業救援者によるフォロー体制の充実が必要である。

後方支援のみを実施した活動者にも症状が見られた。先行研究では後方支援活動者に対する調査研究は見当たらない。

- 少なくとも市民では、惨事ストレスのケア対象は後方支援者を含む活動者全体に及ぶと考える。

解消方策をとらなかった人が46.2%おり、うち62.9%に症状がみられ、14.3%は現在も継続している。

- 活動後のストレスに関する実態、ケア方法や手段・情報を社会に広く周知することは有用である。

【今後の課題】

市民向けの災害時活動後メンタルケアツールを開発・啓発するとともに、事後の支援体制の構築、カウンセリングやメンタルケア費用の公費負担等の具体的方策の実現に繋げたい。